

「ワッツィ 人民は敵、」

佐々木治己

あらすじ

ゆるキャラショーが始まる。コード処理などをする会場スタッフ・ワッツィが、ショーを妨害し乗っ取ってしまう。日本国からの独立を宣言したワッツィの戯言と独裁がはじまっていく。ゆるキャラたちは反発、抵抗するが、ワッツィーショーを止めることができるのか。ワッツィとゆるキャラ、そして司会者が織りなす、ゆるキャラショー。

第一場

舞台に明かりが点くと、司会者のような女とワッツィが登場する。司会者はバインダーを左手にマイクを右手に持っている。舞台上には、マイクの音声を拡大するためのアンプがある。アンプにマイクのコードが繋がっており、司会者が歩く度に繕れてしまうコードをワッツィが捌いている。ワッツィは手に日本国のポスターを持っている。「美しい国」と大きく書かれ、富士山と桜の写真が印刷されてある。ワッツィが慌ただしく動く結果から、徐々にポスターは折れ曲がってしまうが、その度にワッツィが直している。

司会 （ワッツィに目配せをする） みなさん、こんにちは！（マイクを観客席に向ける） あれ？ 元気がないみたいですね！ もう一度、みなさん、こんにちは！（マイクを観客席に向ける） はい、こんにちは！ 今日は、日本国に来ていただきありがとうございます！ たどたどしい司会者ですが、精一杯やりますので、最後まで楽しんでいってくださいね。（バインダーを見る） えっと、まず、みなさん、日本国へは初めてですか？ こんなに美しくて、治安も良い国には来たことがないと、みなさんに仰っていただいて、私もとても嬉しいです。今日は、折角、日本に来ていただいたみなさんに、もっともっと、日本国を知っていただきたいと思います。あとでゆるキャラ・ゲーミンちゃんも登場するので、そのときは写真撮影もできますよ！ では、写真撮影の前に、日本国のクイズをします。遠慮なく手を挙げて教えてくださいね！ クイズに正解すると、プレゼントも用意しています。プレゼントの中身はクイズに正解してからの楽しみとなっております。実は、私もプレゼントの中身は知らないんですよ。もし私がプレゼントの中身を知っちゃったりすると、私が難しい質問を出してプレゼントを独り占めしてしまうかもしれないという心配があったのかもしれませんが。（バインダーを見る） えっと、でも、そんな心配入りませんね！ こうやってわざわざ日本国に来てくれるようなみなさんは、私よりも日本に詳しい人ばかりでしょうね！

ワッツィはコードを引っ張り、マイクを落とさせてしまう。

司会 ワッツィ！（落ちたマイクを拾う）大変失礼しました！では、気を取り直して問題です。（バインダーを見る）今はこうして、いろんな方が訪れることができるようになった日本国ですが、昔は外から来る人たちを拒絶していたことがあります。そのことを何と言うのでしょうか？

ワッツィ 防人。

司会 ワッツィ！ 答えないでください。そして不正解です！

ワッツィ 天孫降臨。

司会 ワッツィ！ 答えないでください。それにそれは受け入れたじゃないですか！

ワッツィ 前九年の役。

司会 さあ、みなさん、分かりますか？ 手を上げてくださいね！

ワッツィがコードを抜いてしまう。

司会 ワッツィ！ あなた何をさっきからしているんですか、この茶番の邪魔をしないでください。

ワッツィは抜いたコードをアンプに挿し、ワッツィを睨む司会からマイクを取る。その際、観客席から挙手があったとしても無視をする。「鎖国」と答える方がいても無視をし、上手からマイクスタンドを持ち、スタンドを中央に立て、ゆっくりとマイクをスタンドに差し込む。

ワッツィ みなさん、お集まりいただきありがとうございます。ただ今なされたクイズには大きなミスがありました。鎖国という答えを導き出そうとした質問ではありましたが、鎖国という答えを引き出すには、ひどく大雑把な質問であり、日本という国の観光 PR をする上で意図的に選ばれた問題を聞き、不愉快

になった方もいることと思います。私の国籍が示すところの日本国なるものは、昨日今日出来た国ではありません。その国の成立には長い歴史がありました。しかし、歴史といっても歴史はいつでも作り変えられるものでもあります。私は現在、日本国籍を有する日本人ではありますが、それというのも、日本国籍を有する者たちの間に生まれた結果であり、自らの意思で日本国籍を獲得したわけではありません。そのため、日本国の歴史に私自身は責任を負うことはないと長年思っておりましたが、日本国籍を有しているという事実だけで、そして日本国から何らかの保証を受けている身としてみれば、日本国が歩んだ歴史に対して私自身も何らかの考えを持つ必要があるのではないかと考えるわけです。つまり、私が何を言いたいかというと、先ほどのような質問は、私が考える日本国の、そして、日本国の排外主義を一面的に捉えているということになるわけです。鎖国だけが外から来る者を排除したのではない。天孫降臨だけが受け入れたのではない。私たちの日本という国は、現在では、海に囲まれているという、つまり、島国であることから分かり易いように、もともと、入りにくい場所だったのです。そのため、島の中に入れば、すべて迎え入れたかのようになり、島の外に入れば排除したかのようになるという分かり易いことが、まず一つ。つまり、鎖国という答えは導きだせない。拒絶し、排除したのは、まずは、「島」というべきなのです。そして、その島の中においても、日本の歴史を考えれば、多くの服わぬ者を排斥し、略奪し、殺戮し、その後も多くの侵略や交易などで、迎え入れては、排除することを繰り返し行ってきたのです。この「美しい国」の内情は、ここに日本国籍を有する者は、略奪と殺戮の申し子たちなのです。

司会 はワッツィを見ては、バインダーを何枚かめくる

司会 そんなことありません。私たち日本人の大半は、何の罪もない者たちです。だから日本は、美しく、治安もよく、親切な人に溢れています。

ワッツィ 略奪者が親切でないと誰が決めたのか。殺戮が美しくないと誰が決めたのか。治安が圧倒的な暴力によってなされていることなど、考えるまでもなく分かることだ。

司会 ワツィ！ このゆるキャラショーをどうやって進行するつもりなの？

ワツィ みなさん、今日は日本国に来ていただきありがとうございます。日本国は私が先ほど説明したように、嗜虐的かつ隷属的、殺し殺されるという愛憎に溢れた国です。このような国に一歩足を踏み入れれば、地獄なのか天国なのか迷われることもあるかと思います。日本国は日本国籍を有しないものを、歓待し、排斥し、笑顔振りまき、搔っ攫います。郷に入りては郷に従えと押し付ける反面、はにかみながら **say hello** と声をかけます。みなさんは、私よりも日本国に詳しいと思いますので、いろいろと心当たりがあると思いますが、私たちはこのような二面性を有しつつも、やるときには一丸となつてものにあたるのです。これはショーです。みなさんの中で、私が日本国を嫌っていると思いの方はいますでしょうか。それは誤解です。私は日本人です。この日本国という祖国と限りなく一体化しようとして努力しているところです。みなさんの中で、私が愛国的すぎると思う方はいるでしょうか。それも違います。愛憎国的というのが似つかわしいようにも思います。私はこれからショーの仕切り直しをしたいと思っていますのです。この雇われ司会者に何が出来るというのでしょうか。この司会は、いまこの場を円滑に行くようにとしか思っていない。ゆるキャラショーの進行はこうです。日本国の **PR** をクイズ形式で行いながら、日本の歴史と美しさを紹介し、最後に、ゆるキャラとの撮影会を行うというものです。しかし、それではみなさんに日本という国を十分に **PR** したことはないのではないかと思います。日本国の未来と言いましょうか。日本国のこれまでの歴史の中で現れていない部分をショーにする必要があるのではないのでしょうか。偽史ではありません。日本国に足りない部分、つまり、これから訪れる部分です。

司会 今日は日本国に来ていただきありがとうございます。今日は、予定と少し変わってしまいましたが、ゆるキャラ・ゲーミンをお見せしたいと思います。では、みなさんお待ちかねの日本国非公認ゆるキャラのゲーミンです！ 今日は、特別に四人のゲーミンが来ていますよ！

舞台袖からゲーミンが見える。

ワッツィ 本日、只今を持って、日本国より独立をする！ みなさん、それぞれに属している国や社会や家族などがあると思いますが、ここでみなさんと独立しようと思うのです。日本国に必要なのは日本国からの独立なのだ。この独立を果たした後にこそ、日本国を問うことができる。そして飛躍を許していただければなら、独立した私たちは、この場所から一步出れば関わることになる日本のみならず世界を問うのです。このように独立はあるべきなのだ。私たちは独立した！ なぜ独立したのか。なぜ、独立しなければならなかったのか。なぜ、独立するべきなのか！

私は思う。世界は美しくあるべきだと。しかし、なぜ、そうではないのか。私の目にだけ美しく映っていないのであれば、私は自らの目を覆うだろう。しかしそうではないのだ。私一人が目を閉じようとも、世界は何も変わらない。同じように私一人が美しいと信じ込んでも世界は何一つ変わらない。私は世界を変えたいのだ。

ゆるキャラ・ゲーミン1が登場する。

ゲーミン1 ワッツィ！ 世界を変える必要なんてない。このままだって悪くない。

ワッツィ 確かに悪くはない。悪くないなら変える必要はないのか？ 今現在悪くないからと言って、これからも悪くないままであると思えるのだろうか。私たちは悪くないときには我慢ができる。悪くない、世界は決して良くはないが悪くはない。徐々に良くなる可能性がないわけではないし、声を上げるのは、悪くなってからだっていいじゃないか。とこう思うだろう。しかし、悪くないと思っている人よ、本当に悪くないだけか？ 本当は良いんじゃないか。良いと思っているんじゃないか。この世界が悪くないってことは、この世界が良いと思うことと同じじゃないのか。そうだ！ 悪くないと思うことは、この世界を完全に良いと思うことに対する批判でもあれば、羞恥でもあれば、逃げでもある。私は言おう！ この世界を良いと思ったときに、私は自分が圧迫者、抑圧者、篡奪者、征服者、略奪者になるのだ。私たちは加担しているのだ。

司会 ワッツィ！ どうするつもりなの！

ワッツィ さあ、ゲーミン、あいつの手を縛れ！

ゲーミン1はワッツィに命じられるまま司会の手を縛る。

司会 みなさん、安心してください、今日は日本国に来ていただきありがとうございます。これもショーの一部ですのでご安心ください。

ゆるキャラ・ゲーミン2が登場する。

ゲーミン2 ワッツィ！ 私たちは何もしていない。ただ真面目に働き、従っているだけだ。私たちは圧迫も、抑圧も、篡奪も征服も略奪もしていない。

ワッツィ はっきり言おう。私たちはしているのだ。美しくない世界を作る努力をしているのだ。これでいいと思うだけで、目の前の悲しみ、痛み、悔しみ、恨み、そういった感情を生み出す努力をしていると言ってもいい。私たちはみ過ごす努力をしているだけでなく、悲しみを生む世界を作り続けている。隣人の悲しみを前に楽しみ、痛みを踏みにじり、恨みを責めたのだ。それはもちろん、仕方がなかった。私たちにはそれしかできなかった。そうする私たちを罰する法も禁じる掟もなかったのだから。そう、悪くない。私たちは悪くない。

司会 ゲーミンの言う通りですから、みなさん、安心してください。今日は日本国に来ていただきありがとうございます。

ワッツィ さあ、ゲーミン、あいつの足を縛れ！

ゲーミン2はワッツィに命じられるまま司会の足を縛る。司会の姿勢は、体育座りのようになり、手首と、足首が縛られている。

ゆるキャラ・ゲーミン3が登場する。

ゲーミン3 ワッツィ！ そうだ、私たちは悪くない。私たちを批難するのは不当だ！

ワッツィ 不当だ、そうとも不当だ。君たちが開き直りに似た何かで、自分には罪がないと思うことが不当なのだ。君たちだけじゃない、私もまた選んできた。私たちは多くの選択肢から今のこの状況を選んできたのだ。どんなことであれ、私たちは関わっている。関わるからこそ、様々な権利をも有している。私たちの権利。それは義務を伴っているのだ。そしてその義務とはなんだろうか。義務とは一つしかない、互いに助け合う義務だ。私が批判するのは、そこだ。私たちは助け合っているのだろうか。私たちは知らなかったから、助けられなかった。私たちは分からなかったから助けられなかった。

司会 ワッツィ！ あなたは何を言っているのか分かっていない。だからみなさん、安心してください。今日は、日本国に来ていただきありがとうございます。ゲーミンたちとの写真撮影がありますので楽しみにしてくださいね。

ワッツィ さあ、ゲーミン、あいつの口を塞げ！

ゲーミン3は司会の口を塞ぐ。(殺すという意味ではない)

ゆるキャラ・ゲーミン4が登場する。

ゲーミン4 . . .

ワッツィ 私たちに訪れたのは沈黙か、余裕を持った発語だ。何かを語ったところで常に何か足りないものだ。全てを言い尽くしたかのように思った矢先に、余計なことばかり並べ立てたことに気がつく。だから沈黙するのだ。正しい選択だ。沈黙は語るものを脅かす。沈黙は攻撃だ。安易な発言より饒舌になる。しかし、その沈黙に隠れているものはなんだ？ 沈黙をしたときにどこを見るのが重要だ。その眼差しはどこを向いているかだ。その眼差しが私と同じ方向を向いているのか。いや、そうではない。その沈黙には何もない。無力な沈黙ではない。何かに従った沈黙だ。吹雪の中で口を塞いでいるだけなのだ。

司会が立ち上がる。(ヒーローもののような意味ではない)

ワッツィ さあ、ゲーミン、あいつを柱に縛りつけろ。

司会は中央の柱または壁に縛り付けられる。

ゲーミン1 ワッツィ、歌おう。

司会は頷く。

ゲーミン2 ワッツィ、踊ろう。

司会は頷く。

ワッツィ 私は歌わない。私は踊らない。

ゲーミン3 ワッツィ、勝手な真似はそろそろ止めろ。歌って踊ればそれで済むんだ。訳の分かったような分からないような戯言はいい加減にするんだ。

司会は激しく頷く。

ワッツィ 私は歌わない。私は踊らない。

ゲーミン1 じゃあ、何しに出てきたんだ。ワッツィ、お前は俺たちが出たらさっさと音楽をかけるんだ。そうだろ、ワッツィ。

ワッツィ いつまでそんなことを続けなければならないのだ。歌って踊ったからなんだというのだ。

ゲーミン1 そんなものに意味はない。いい歌なら楽しめるし、楽しく踊れば愉快になる。

司会は頷く。

ゲーミン2 いや違う。歌は何かを確実に伝えるんだ。踊りは何かを確実に感じさせる。

司会は頷く。

ゲーミン1 歌や踊りにそんな堅苦しいものを持ち込むな。楽しく陽気にやっていたらいい。

司会は頷く。

ゲーミン3 お前らがどう思うかが問題じゃない。やらなければならないときにはやらなければならないだけだ。

司会は頷く。

ワッツィ そう、やらなければならないときにはやらなければならない。私は歌わないことをし、踊らないことをする。

ゲーミン1 ワッツィ、それなら舞台から降りてくれ。

司会は激しく頷く。

ゲーミン2 そうだ、ワッツィ、君は舞台から降りるべきだ。

司会は激しく頷く。

ワッツィ 私がなぜ舞台から降りなければならないのだ。私はこの場から出て行くことはしない。私はこの場からはじめるのだ。

ゲーミン3 ワッツィ、何をはじめるんだ？

ワッツィ 独立だよ。私たちは独立をはじめるんだ。

ゲーミン1 独立？ ワッツィ、独立とはなんだ？

ワッツィ それぞれがそれぞれの名の下に美しい世界を享受することだ。

ゲーミン2 ワッツィ、そのためには多くの人々の共感と賛同を得ることが必要なんだ。私の考えでは、ワッツィ、一人一人が団結する必要がある。そして団結するためには、それぞれが問題意識を共有する必要があるんだ。そのために、思いを歌にのせ、ともに体を動かして共感していくことが必要なんだ。

ワッツィ 一つの美しい世界を享受することじゃない。

ゲーミン3 すでに美しいじゃないか。外を歩けば笑顔で溢れている。すでに十分じゃないか。

ワッツィ 笑顔以外を見ようとしていないだけだ。

ゲーミン2 ワッツィ、私もそう思う。そう思うからこそ、問題意識を共有せねばならないのだ。

ワッツィ 人は一人だ。共有出来ることなんてない。あいつ（司会）を共有することが出来るのか？

ゲーミン1、2、3が一斉に司会を見る。司会は首を横に振る。

ワッツィ つまりはそういうことなんだ。何もここで男女差別だ、男女平等だということを問題にしたいのじゃない。何かがあって、それをどうするかだ。人権だなんだと理性に訴えて誤魔化すやり方は納得する奴だけの約束にすぎない。何かあって、それをどうするか、というときにできない問題もあるということだ。しかし、それはできないことなのか？ あるやり方ではできないというだけで別のやり方ではできることなのではないか？

ゲーミン1 別のやり方をしなければならぬくらいなら、今のままで満足す

るというやり方だってある。

ゲーミン3 ワツツイ！ お前が何を指し示しているのか、想像するだけでいやになる。なぜ、今のままではいけないんだ。彼女だけを虐げるようなことをするのはおかしいじゃないか。

ワツツイ 君たちは何かを誤解している。あいつを共有するというのが、そんなにも無茶なことなのか？ それがあいつを虐げるということになるのか？ 別にあいつを共有する必要はない。君たちが何か勘違いをする要素として、あいつが女だということがあるのだろう。そして、日本国という先進国気取りの精神性で、男尊女卑的な扱いに対して苛立ちを覚えているのだろう。私は別にあいつでなくても構わない。君たちの誰か一人でも構わなければ、私自身でも構わない。ただ、何かを共有するなんてことは、嘘のように語られて、まるで何かを共有しているかのように振る舞いながら、実のところ、人間一人も共有することができないということがそこにあるだけだ。

ゲーミン1 それは当たり前のことだ。前提だ。個として人間があることは変えることはできない。

ワツツイ 前提だから問う。

ゲーミン3 ワツツイ、お前の子供じみた発想にはうんざりだ。お前の考えには社会性がない。お前は独立すると言ったが、お前の独立についていけるやつはいない。人間の個としての有り様を奪うことは、個によって形成される社会を成り立たなくさせる。社会がない中でお前が言う独立などはありえない。

ワツツイ 何をもって個としているかなのだ、問われているのは。

ゲーミン2 ワツツイ！ 私には君の言っていることが分かる。個による欲望を仕方ないとすることに私も反対だ。欲望を抑え、自分以外のもののために尽くし、より良い社会にしていく、そういうことをするためには、個の欲望は放棄しなければならない。彼女を共有することはできないが、彼女と共にあるこ

とは出来るだろう。もちろん彼女にも欲望を捨ててもらふ必要がある。ある種の役割を、みなと同じく機能として考える必要があるのだ。

ワッツィ 私は人間が機械のように機能としてのみ生きることを考えているのではない。私が最初から言っているのは、何かが違うと思いながら、それを美しい、素晴らしいなどと自らに言い聞かせていることを問うということなのだ。なぜ、分かっているながら誤魔化すのか。分かっているだろう、違うと思いながらも、是正するために与えられている道具は使用禁止の道具ばかりしかないのかということが。私たちが持っている手段はすでに無効だとされているのだ。なぜなのか。私は言っているのだ、使っいい。私たちが最初から持っている道具を使っいい、手段は何をしても構わないと言っているのだ。そのための独立なのだ。

*注 「余は言わん 全日本の窮乏国民は神に祈れ 而して自ら神たれ 神となりて天命を受けよ 天命を奉じて暴動と化せ 武器は暴動なり殺人なり放火なり 戦場は金殿玉楼の立ち並ぶ 特権者の住宅地なり 愛国的大国民は天命を奉じて道徳的大虐殺を敢行せよ 然らずんば遂に日本は救われざるべし」 磯部浅一『獄中手記』

ゲーミン1 それがお前の言う美しい世界なのか？

ワッツィ 少なくともこれまでよりは。

ゲーミン2 君の独立はただの好き勝手をするというだけだ。

ワッツィ 誰かの好き勝手に従うよりはましだ。

ゲーミン3 お前の言う道具というのは何のことなんだ？

ワッツィは司会を柱または壁から解放する。そしてポケットから黒いゴミ袋を出し被せる。

ワッツィ つまりはこういうことなんじゃないかな。

暗転 暗転中にゴツゴツを音がする。

第二場

舞台上には、黒いビニール袋が二つ転がっている。ワッツィはそのうちの一つに座っている。

ワッツィ みなさん、今日は、独立を祝うパーティーにお集まりいただきありがとうございます。当初は、日本国非公認ゆるキャラ・グーミンショーということになっておりましたが、日本国から苦情があったため、日本国からの独立ショーへとプログラムを変更させていただきました。また、内容にいささか稚拙な部分もおありと思いますが、独立に関してはみなさんの方が私たちよりもお詳しいと思いますので、脳内補正と言いますか、きっとこんなことを言っているのではないかとご想像していただければと思います。さて、私どもは独立を果たし、先ほどの暗闇の中で独立に際して必要と思われる諸問題を解決したところです。つまり、独立したといっても私たちには日本国と独立戦争をするほどの武力、財力などの国力はありません。辛うじて私たちの元にあるものといえば、この場所だけです。しかし、この場所にしても、未来永劫にあると思っているわけではありません。私たちの独立も、日本国の歴史上いくつもあった反乱の一つに過ぎないのかもしれないのです。ですから、これはショーなのです。革命でも大逆でもないのです。ショーです。少しのいたずら心です。床屋政談のような他愛のないものです。戯言です。しかし、劇場から戯言をとってしまったら何が残るといのでしょうか。それでは戯言の続きを始めましょう。私がどうやってグーミンたちと過ごし、そして独立はどのような結果となっていくのか。私が望んだのは美しい世界です。誰もが信じなくなったすべての人々が平等である世界です。愛はすべての人に降り注ぎ、富は公平に分配され、誰しものが充実するような世界。そんな世界はどこにもないと、いま、当然のように、当たり前のように、どこにもないことが前提となっているような世界。私はそれを望んだだけなのです。では、ユートピアショーを始めましょう。It's a showtime!

ゲーミン1、2、3が歌って踊りながら出てくる。

歌「独立するにあたって」

少しだけ先のことを考えた
前を見るように考えた
何にもやることがないと思った
何をしても無駄だと思った
全てが決まっています
例外すらも決まっている
そんなことだから
独立することにした

少しだけ前のことを考えた
振り向くように考えた
何もしてこなかったと思った
何事も同じだと思った
全てが終わっています
はじまることなんてない
そんなことだから
独立することにした

少しだけ今のことを考えた
立ち止まるように考えた
何もしていないと思った
何をしているのかと思った
全てがそのまま
何かになることもない
そんなことだから
独立することにした

歌おう、そんなことを

踊ろう、そんなことを

ワッツィ 歌も踊りもこれでおしまい。

ゲーミン1 ワッツィ！ 歌わないなら、舞台から出ていけ。

ワッツィ 私は歌わない。

ゲーミン3 ワッツィ！ 踊らないなら、舞台から出ていけ。

ワッツィ 私は踊らない。

ゲーミン2 ワッツィ！ 君は話すだけだ。荒唐無稽な独立の話をするだけだ。君の話は実現不可能な戯言に過ぎず、君は自分で戯言だと前もって宣言することで、自らの言動への責任を放棄している。それはとても卑怯なことだ。ただ開き直っているだけだ。歌いもせず、踊りもせず、ただ話をしているだけだ。

ワッツィ 歌うのが責任か、踊るのが責任か。私は歌わず、踊らぬことで、私が何をするのかを示している。沈黙が雄弁なように、私の雄弁は沈黙に近い。

ゲーミン2 ワッツィ！ 君の駄弁は言葉遊びでしかない。私は君の独立という話に興味がある。私はゲーミンであることをやめるためにゲーミンの着ぐるみを着ていたんだ。

ゲーミン2は、着ぐるみを脱ぐ。

ゲーミン2 ワッツィ！ 君には戦略がない。つまり、政治がないのだ。政治とは遂行行為なのだよ。何かがある、それをどうにかする。ワッツィ、君の言う通りだ。私もこの社会を変えようと日々、着ぐるみバイトに身をやつしながら、様々な活動をしているのだ。社会は突然変わるのではない。少しずつ理解者を獲得し、地道ではあるが、一人一人を啓蒙することでより良い社会が生まれる。人々はやがて気がつくものだ。生きるために多くの富は必要ない事を、

争いの無益なことを、人間は必要なものがあればそれで十分なのだ。欲望などというものは、所詮、自分が望んだものでなく、自分を取り囲む環境から望むように要請されたものでしかないのだ。我々の欲望こそが我々を搾取するために作動している機械のようなものなのだ。

ゲーミン3は、着ぐるみを脱ぐ。

ゲーミン3　ワッツィ！　私たちは誰一人として悪くない。それは唯々諾々と従ってきたからということでもない。一人一人の欲望は誰かから望まれた欲望なのだから、一人一人を断罪し、罰し、批判し、批難してはならない。私たちはそれぞれに寄る辺なく、肩寄せ合う存在なんだ。ワッツィ、お前が美しい世界を夢見るのは悪い事じゃない。しかし、それを全ての人に押し付けるのは問題だ。私たちは一人一人、美しい世界をすでに持っているのだ。それが誰かに与えられた世界であっても、それが、真実ではないとしても、それぞれに持っている世界を壊すようなものは違うんだ。

ゲーミン1は、着ぐるみを脱ぐ。

ゲーミン1　ワッツィ！　こうして一人一人がお前に語りかけるのは、舞台上のお約束を守っているからだ。きっかけだ。こういったルールにわたちが従っているからこそ、いまこの場も混乱に陥らずに済んでいる。こういうことを軽んじてはならない。それぞれが与えられた台詞を最後まで言い切り、その次、その次と何度も稽古を重ねてきたように進めていだけなんだ。それに関しては、ワッツィ、お前も同じじゃないか。お前とわたちは何も変わらない。同じ稽古場で練習し、こうして、同じ時間に同じ場所に現れる約束を守っているだけなんだ。

ワッツィは黒いゴミ袋を角材で殴打する。

ゲーミン1　ワッツィ！　やめるんだ、それはしてはいけない。

ワッツィ　なぜだ！

ゲーミン2 それはしてはいけないことなんだ。

ワッツィ なぜだ！

ゲーミン1 無抵抗なものに一方的な暴力を奮うことが許される筈がない。

ワッツィ 君たちは、一緒になって司会の女を縛ったね。それはどうしてだ。

ゲーミン3 ワッツィ！ 君は美しい世界を望んでいるんだろう？

ワッツィ そのためなら何をしてもいい。

ゲーミン3 ワッツィ！ 君は公平で平等な世界を望んでいるんだろう？

ワッツィ そのためなら私はすべてを捨てよう。

ゲーミン1 ワッツィ！ お前は矛盾していると思わないのか？

ワッツィ 矛盾していたからといって何の問題があるんだ？

ゲーミン2 ワッツィ！ 矛盾は破綻なんだ。暴力には正当な手続きが必要なんだよ、ワッツィ。多くの人が納得する理由があれば、暴力は肯定される。いや、むしろ、暴力ほど分かりやすく人々に訴えかけるものはないとすら言えるだろう。しかしその暴力は理由がなければならぬ。手続きだよ、ワッツィ、手続きさえきちんと踏めば暴力は肯定されるんだ。ワッツィ、君のやり方では、誰もが納得しないだろう。

ワッツィ 矛盾などは小さな問題だ。手続きは行ったときに消えるものだ。何かがある。それをどうするか。それだけで充分なんだ。

ゲーミン2 ワッツィ！ 違う。全く違う。それでは誰も巻き込めない。ワッツィ、君は君の言動に責任を取らねばならないのだ。

ワツィ 責任だって？ そんなものを信じるのか？ 君たちに何の責任がある？ 君たちに果たせる責任なんてものがあるのか？

ゲーミン3 ワツィ！ この世界が真実に基づいていないというのであれば、お前は真実を語り糾弾しなければならない。お前に真実がないのであれば、お前は黙って、この世界に従い続けなければならない。

ワツィ 真実だって？ 真実はいつでも二つ目の嘘だ。真実を作りたければ、二つの嘘を作ればいい。一つ目の嘘はバレるための嘘。二つ目の嘘は本当の嘘。一つ目の嘘を二つ目の嘘が暴けば、二つ目の嘘が真実になる。真実なんてこんなものだ。

ゲーミン2 ワツィ！ 君は何を言ってもいい、しかし、それは無力であることを知るべきだ。

ワツィ 一緒になって女を縛ったね。そして、ゴミ袋に放り込んだじゃないか。

ゲーミン1 それは、そういう筋書きだからじゃないか。そういう稽古をしてきたじゃないか。その通りにやっただけじゃないか。

ワツィ 君たちはしたかったんだ。その方がよかったんだ。女に何かを選ばせることをしたくなかったんだ。沈黙している奴をそのままにしておきたくなかったんだ。だからそういう筋書きに従ったんだ。そういう稽古を続けてきたんだ。君たちには矛盾がない。首尾一貫している。

ゲーミン3 ワツィ、私は望んでいなかった。望んでいなかった。

ワツィ 望んでいないことに加担し、そして享受する。望んでいなかったのか、少しも。夢見なかったのか、少しも。今の方がいいんじゃないのか。今、このときの方がよっぽど希望がある。ここにいるすべての者に希望がある。生殺与奪を握ったんだ、我々は。共有しているんだ。

ゲーミン2 ワッツィ！ 分配は何よりも必要だ。しかし、そのためには、何よりも合意形成が必要なんだ。ワッツィ、君は結果を出しすぎる。グロテスクな事実はそのままでは受け止められない。できるだけ口当たりよくしなければならぬ。我々が後ろめたさを感じないように生殺与奪権を持たせるのであれば、あの女やあいつがこのようにされて当然だと感じさせる理由や手続きが必要なんだ。ワッツィ、君は、私たちをどうしたいんだ。

ワッツィ 分からないのか？ 私は君たちに後ろめたさや、矛盾や、葛藤から永久に独立して欲しいと思っているんだ。理由や手続きによって心の平安を得るような隷属した状態にあって欲しくないんだ。

ゲーミン2 ワッツィ！ それは無理だ。そんな中で希望を感じることもなんて無理だ。我々は人間なんだ。理由が必要なんだ。いま自分が生きていることを、正当化できるだけの理由が必要なんだ。生きていく意味を、誇りをもって生きる理由が必要なんだ。

ゲーミン3 ワッツィ！ 元に戻そう。全て元に戻そう。日本に戻ろう。

ワッツィはゴミ袋を角材で殴打する。

ゲーミン1 ワッツィ！

ワッツィはゴミ袋を角材で殴打する。

ゲーミン2 ワッツィ！

ワッツィはゴミ袋を角材で殴打する。

ワッツィ 君たちは私を止めようとしぬい。

ゲーミンたちは一斉にワッツィを止める。

ワッツィ さあ、君たちには私を袋の中に入れる理由ができたんじゃないか？

ワッツィが黒い袋をゲーミン2に渡す。

ゲーミン2 ワッツィ！ 君はやりすぎたんだ。君がこうなるのは仕方のないことだ。君もこうされることに不満はないだろう。

ゲーミン2はワッツィを座らせ、ゴミ袋を被せる。

ゲーミン2 ワッツィ！ 私が君にこうすることに反対する者はいない。そして君は、君がしてきたことをされることに反対しないだろう。

ワッツィ 暴力は、ごく自然の行為である。いかなる批判にあったとしても、侵犯によって、我々は生きている。

ゲーミン2 ワッツィ！ 我々は自然な行為だからやるんじゃない。暴力を必要とする理由があるからやるのだ。

ゲーミン1、3は角材を手を持つ。

ワッツィ 君たちの振る舞いには希望がない。全くない。何かがある、それをどうするかだ。この二つだけの関係に君たちはできない。何かがあり、それをどうするかに理由が入る。理由は不公平だ。(黒い袋を被ったまま立ち上がる) こうなることに理由が必要なのか？ 必要ない。私のようになっている者がそこにある。彼女がああなる理由はなんだった？ あいつがああなる理由はなんだった？ 今では理由があるのだろう。彼女はああなって仕方なかった。不運とで言えばいいのか。あいつがああなるのも不運だった。私がいたからだ。筋書きがあったからだ。それは理由か？ 私のみが君たちに理由を与えたのではない。君たちそれぞれが彼女でもあいつでもなかった。そして私ではなかった。それが理由だ。そして君たちはこれからどうやっていくつもりだ。黒い袋などはいくらでもある。縛り付けるロープなどどこにでもある。角材も転がっている。君たちはどうするのだ。何かがある。それをどうするか。理由で動いてし

まったら後戻りはできない。何かがあったときに理由が入り、その結果のどうするかはもう決められている。君たちは隷従の道を選んだのだ。

暗転 暗転中にゴツゴツを音がする。

第三場

照明が煌々と点くと、舞台には、ゴミ袋から両足が太ももまで見えている司会と、黒い袋が三つ転がっている。マイクスタンドが中央にある。ワッツィはアンプにコードを差し込む。ゲーミン4がマイクスタンドの前で語り始める。

ゲーミン4 みなさん、こんにちは。今日は、日本国に来ていただきありがとうございます。日本はとても美しい国として有名です。四季折々の景色、歴史的な建造物、そして日本人の笑顔が美しいと外国からいらっしゃる方々はみなさんおっしゃいます。私たち日本国非公認ゆるキャラ・ゲーミンも侍、忍者、芸者のように、すっかりみなさんのお馴染みのマスコットキャラクターとして声をかけていただけるようになりました。今日は、クイズにはじまり、歌と踊りのショー、そして、最後は、みなさんとお別れの写真撮影となります。どうぞ、写真をとってください。ポーズもとります。前列の方が撮り終わったら交代で後ろの人にも譲ってください。一緒に撮りたい方は前に出てきてください。

ゲーミン4は被り物を脱ぐ。

ゲーミン4 さあ、写真を撮ってください。

ワッツィは角材を持ち、ゴミ袋を殴打する。

ゲーミン4 私の前に老婆が歩いていました。老婆の歩みはゆっくりでした。私は老婆を追い越して先に行こうとしていましたが、老婆の横を追い越そうとする度に、向かいから人がやってきました。私は老婆の後ろにいる以外に選択

肢はありませんでした。他にも選択肢がありました。私はただ我慢しました。他にも選択肢がありました。老婆が私に気がつき、私を睨みました。駅に着いて切符を買おうとしました。券売機の前に中学生と母親がいました。券売機は二台ありました。一つの券売機で母親が切符を買っていました。隣の券売機に中学生は立ち母親を見ていました。私は中学生の後ろに並んでいました。私は待っていました。他にも選択肢がありました。私は我慢していました。母親が私に気がつき、怪訝な顔をして中学生の袖を引いて券売機から離れさせました。私は自動改札に向かいました。自動改札の前には見送りをしている男性がいました。見送りの男性の後ろで私は待っていました。他にも選択肢がありました。私は我慢していました。見送られる男性が指さしました。見送る男性は振り向き舌打ちすると改札の前からどきました。階段を降りました。階段の下には高校生が五人留まっていたいました。電車が到着したため階段の片側は通れませんでした。私は片側が空くの待っていました。他にも選択肢はありました。私は我慢していました。高校生の一人が私に気付くと、別の一人が私に向かって首をくいと傾げました。電車は行ってしまいました。乗降位置に並びました。数人が並びました。電車が到着して乗ろうとすると出遅れた乗客が電車から出ようとした。私の横の男が電車に乗り込み、出遅れた乗客は更に出遅れました。降車客を待ちました。他にも選択肢がありました。私は我慢していました。私の後ろの乗車客が私を追い越し、肩がぶつかる舌打ちをしていきました。次の駅で前に座っている人が降りました。私は端の席に座りました。ドア付近に女性が立っていました。女性のカバンが私の頭に何度も当たりました。私はそのまま座っていました。他にも選択肢がありました。私は我慢をしていました。女性はカバンをより後ろに向きを変えようとしたときに、私に当たっていることに気がつきました。キャッと小さく声を出し、ドアが開くと降りていきました。目的の駅に着きました。電車から降り、階段を降り、改札を通り、職場に着きました。椅子に座り仕事をしました。同僚が遅刻してきました。会釈をすると睨まれました。メールがきました。「あなたのせいで私は追い詰められています。私が遅刻してきたことを責めるのはやめてください。私は昨晚遅くまで仕事をしていました。私が遅くまで仕事をしていました、私のせいではありません。私のミスが元で遅くまで仕事をするようになったとあなたは私を責めるのでしょうか、仕事をしていればミスはあります。あなたはミスを一度もしたことがないのでしょうか。あなただってミスはしています。私に対して

私を責めるように見るのはやめてください。私がミスをするのはあなたに見られたからです。あなたに追い詰められているのです。私は要領良くはないかもしれませんが、普通です。普通に仕事をしているのです。この仕事は私に合っていないかもしれませんが、この仕事をしたいのです。上手くやれていないことは分かっていますが、私は仕事をしなければならないのです。新しく入る人たちがやめていくのは私のせいではありません。私は人間関係を上手くやるために仕事をしているわけではありません。私がこの場にいるために仕事をしているのです。私がやりにくいと思う人にキツくあたるとは私にとって当然です。私にはこの仕事が必要なのです。仕事に私が必要ないことは、あなたに言われなくても分かっています。私にとってあなたは必要ありません。私を責めるのはやめてください。私はあなたから責められているからこうなっているのです。あなたの責任です。」メールにはそう書いてありました。私はメールを読み、座っていました。他にも選択肢がありました。私は我慢していました。彼女はブツブツと言って職場から出ていきました。定時になり、私も職場から出ていきました。帰宅する途中、老婆や親子や男性や高校生や女性などと再び同じようなことがありましたが私は待っていました。他にも選択肢がありました。私は我慢していました。私は我慢している。他の選択肢を私は選びません。私は待っています。気がつくのを待っています。気がつくのを待っているだけです。他の選択肢は関与です。声を出す、手を出す、足を出す、壊す。私は壊すことを選びませんでした。私は我慢しています。これが世界です。これが美しい世界です。私は我慢しています。他にも選択肢があります。壁がどンドンと叩かれます。郵便受けには管理会社から手紙が入っています。コンビニでは店員が怒鳴られています。インターホンの前には神が降臨したと話す人がいます。身体中が痒くなります。これが美しい世界です。よくあることがよく起こることです。一人一人には何の責任もありません。些細なことは問題ありません。誰も法律を破っていません。罰せられないことは正しいことです。それぞれに愛する人がいます。それぞれに美しい世界があります。他に選択肢はないのです。私たちは我慢を続けるだけです。私は誰かを睨みつけ、首を傾げ、舌打ちをし、キャッと叫び、メールを書く。誰かに怒り、または微笑みをし、足早に立ち去り、ベンチに腰をかけるでしょう。苛立ち、身体中を掻きむしり、誰かと握手するでしょう。何かに気がつくまでは私の世界は完全に美しいままでしょう。何かに気がついたとしたら打ち捨てればいいのでしょうか。不快であ

ることは私のせいじゃない。私の不快を見るものがいけないのです。よくあることがあっただけなのです。それは我慢をすれば済むことなのです。

ワッツィはゲーミン4に黒い袋を被せる。ゲーミン4は黒い袋を被ったまま、観客席に歩いて行って止まる。

ゲーミン4 私は市民。いや、愚民。私はあなた。私とあなたの振舞いにさしたる違いはない。私は何かをしようとしては失敗している。決定され、覆すことができないものの中で、権利や義務はとても大事なものだと言われて戸惑っていた。私は愚民である前に市民だった。しかしそれは強いられたものでしかなかった。

ワッツィ 撮影の時間はこれで終了します。

ワッツィは黒い袋を出し、自ら被る。舞台暗転し、ゴツゴツを殴打する音が聞こえる。明転すると、黒い袋に一つと、司会とゲーミン1、2、3、4が角材をもっている。

おわり 2016.7.29